宇都宮セントラルクリニック

がんの放射線治療施設

海外からも患者受け入れ

11億円かけ先端機器

画像診断や人間ドックなどを手掛ける宇都宮セントラルクリニック（宇都宮市）は、がん患者向けの放射線治療施設を2017年末にも開く。約16億円を投じ、比較的短い治療時間で患部を狙い撃ちできる先端機器などを導入する。中国など海外からも患者を呼び込み、医療ツーリズム振興につなげることを目指す。

ロボットアームを動かし放射線を照射する機器「サイバーナイフ」（イメージ）

新施設「放射線治療センター」は地上2階建てで延べ床面積約1500平方メートル。既存棟の隣接地に10月までに建て、12月ごろ診察を始める予定。

事業費はめぶきフィナンシャルグループ傘下の足利銀行のほか、栃木銀行や群馬銀行からの協調融資で調達する。

総事業費のうち11億円をかけて導入するのが、2種類の新型の放射線治療機器だ。1つが「サイバーナイフ」と呼ばれる装置で、自在に動くロボットアームで様々な角度からがんに放射線をピンポイントに当てる。

新施設は既存施設に併設する（宇都宮市の宇都宮セントラルクリニック）

正常な細胞組織や臓器を傷つけずに病巣を狙い撃ちできるため、転移が進む前の小さながんに有効という。脳腫瘍や肺、前立腺などのがん治療に保険適用されている。

サイバーナイフは放射線の照射や装置の準備に要する時間を含めて1回あたり1時間未満の時間で使える。通院も5～10回で終えるという。保険診療での費用も60万～120万円程度で、他のがん治療に比べ負担が少ない。

もう1つの機器は「トモセラピー」。がんの転移が進んだ患者向けで、正常組織を避けながら放射線を照射できるため、少ない副作用で効果を得られるとされる。

同クリニックによると、2つの装置はそれぞれ大学病院などで導入される。ただ、1つの施設で2つの機器を備えるのは全国でも珍しいという。こうした点を生かし、海外の患者の利用も取り込む考えだ。

同クリニックは15年から中国・北京にグループ会社を置き、陽電子放射断層撮影装置（PET）でのがん検診で中国から月間約20人を受け入れている。今回の新施設でも、米国などより費用が安い点をアピールし、利用獲得を目指す。宇都宮グランドホテル（宇都宮市）など近隣の提携ホテルを滞在拠点にしてもらうことで、栃木県内の観光周遊につなげる。

新施設では月間60人の新規患者の獲得を想定する。同クリニックの16年度の医業収入は約12億円。新施設が通年でフル稼働する18年度には16年度比4割増の約17億円に伸ばす計画だ。

日本経済新聞（2017年6月15日　北関東版）